

|  |    |
|--|----|
| ●巻頭インタビュー  | 2  |
| ●家計管理・生活設計のツボ<br>〈第7回〉「資産形成」のための<br>基本的な考え方                      | 6  |
| ●まんが わたしはダマサレナイ!!<br>架空FX取引詐欺                                    | 8  |
| ●連載エッセイ<br>—経済学者が暮らしをあばく—<br>〈第3回〉タブー<br>越えなければならぬ壁              | 11 |
| ●そこが知りたい! 暮らしの金融知識<br>家族で防ごう<br>「振り込め詐欺」                         | 14 |
| ●金融教育の輪<br>消費者庁  | 19 |
| ●なるほど知るぼると<br>「家計夢ノート」が<br>新しくなりました。                             | 20 |
| ●金融教育の現場レポート<br>『プリペイドカードについて考えよう』<br>～現代社会に適切に対応したくましく生きる児童の育成～ | 22 |
| ●金融広報アドバイザーの誌上セミナー<br>『どうする?子どもの金銭教育』<br>～子どもと「お金」の話をしよう!～       | 26 |
| ●金融・経済 おもしろ豆知識<br>〈第7回〉「東海道中膝栗毛」                                 | 28 |
| ●おたよりコーナー  | 29 |
| ●都道府県金融広報委員会一覧   | 30 |
| ●まなびや訪問<br>愛知県 安城市立安城中部小学校                                       | 31 |

焦らず続けることが大事  
やれば結果はついてくる

巻頭  
インタビュー

岡崎朋美さん

元スピードスケート選手／長野五輪銅メダリスト



1998年の長野オリンピックのスピードスケート女子500mで銅メダルを獲得し、2006年のトリノオリンピックでは日本選手団主将を務めるなど、世界を舞台にスピードスケートのアスリートとして活躍、その「朋美スマイル」で人気を博した岡崎朋美さん。2013年に現役を引退し、現在は5歳のお子さんの子育て真っただ中の岡崎さんに、アスリート人生の基礎をつくった生い立ち、現役アスリート時代、子育て論についてうかがいました。

## スケート王国に生まれ、育つ

北海道東部、オホーツク海へ伸びる知床半島にほど近い清里町で、酪農業を営む家庭に生まれた岡崎さんは、三人きょうだいの末っ子として、大自然を遊び場に育ちます。体力的にも体格的にも、女の子と遊ぶより男の子と遊ぶ方が楽しいという活発な女の子でした。

清里町は冬季には町営スケートリンクを設営するほどスケートに熱心に取り組んでいる土地柄。学校の体育の授業にもスピードスケートを取り入れており、岡崎さんの母親は「朋美が体育でスケートができないと可哀想」と、多忙な仕事の合間にスケートリンクへ連れて行ってくれたそうです。

そんな岡崎さんが本格的にスピードスケートを始めるきっかけになったのは、小学校3年生のときにやって来た転校生の存在です。スポーツ万能の女の子のライバルができ、運動会の徒競走でも1着、2着を争うなか、すっかり仲良しになった二人。そんな大好きな友人が地元のスピードスケート少年団に入ると言い出し、岡崎さんも一緒に入団しました。

「友だちと一緒に同じことがしたいという気持ち

で始めましたが、次第にスケートそのものに夢中になっていきました。うちは酪農業で両親とも忙しく、送り迎えは母がしてくれましたが、彼女の家で待たせてもらったり、食事をごちそうになったり、お世話になることも多く、姉妹のように面倒を見てもらってとても楽しかったのです」。

それでも、練習を休みたいことだってあるはず。そんなとき岡崎さんの母親は、引っ張ってでもリンクへ連れていき、休まず続けることの大切さを教えてくれました。一方、父親は黙ってスケート靴を研ぎ、ボソリと一言、「やるんだったらしっかりやれ」と応援してくれたといいます。

「姉兄の姿を見て育ち、親に言われる前になんでもできる手のかからない子だったので、ほとんど叱られた経験ありません。それだけに、やると決めたら続けることの大切さを教えてくれた両親の言葉は重く、子ども心にも『しっかりやろう』と思いました」。

## スケートのために親元を離れて進学

岡崎さんがスピードスケートに惹かれた理由は、何だったのでしょうか。

「どんなスポーツでも上手にこなせたため、自分でも運動能力には自信を持っていました。だけど、スピードスケートだけは思うようにいかないんです。自分が思っていることと、氷にエッジが伝わる感覚がズレてしまう」。そののがゆさが、負けん気の強さを刺激し、いつも「どうしたら速く滑れるようになるか」を考えていたといいます。

高校は地元の清里町ではなく、親元を離れ、釧路市にあったスピードスケートで有名な女子高（釧路学園高校・2009年に閉校）に進みます。

「他校にはすごい選手も大勢いて、伸び悩んだこ

とも多かったですね。でも、そうした相手に運よく勝てたときの喜びが大きくて、次へのモチベーションになっていました。さばらずに続けて一生懸命やれば結果はついてくるし、怠けてズルをすれば結果は出ない。それだけははっきりしていましたね」。

インターハイでの戦績は4位。ただ、高校卒業後もスピードスケートを続けるかどうかには迷いがあつたそうです。

「小中高の間は周囲にあと押しされ、方向性を作ってもらっていたから、スピードスケートを続けていられたのだと思います。いろいろなことを経験したい時期でもあつたので、就職も考えていました。働いて早く自立したい気持ちもありました」。

ところが高校2年のときに、ある出会いが訪れます。釧路市で全日本スプリントスピードスケート選手権大会が開催され、そこでのちに就職することになる富士急行の監督に声をかけられたのです。

実業団に誘われ、「名門実業団でスピードスケートができる。無名の自分がなぜ監督の目に留まったのだろう」――その驚きと喜びを胸に、岡崎さんは生活を山梨県へと移し、以後は日本中から注目されるスプリント選手へと成長していきます。

## 才能の開花を焦ることなく

こうして岡崎さんは富士急行に入社します。

当時、同社にはスピードスケート界のスター選手・橋本聖子氏（現参議院議員・公益財団法人日本スケート連盟会長）をはじめ、五輪で活躍するレベルの選手が多数在籍していました。そんなエリート集団の中では、岡崎さんの実績は突出したものではありませんでしたが、周りに臆することなく、逆に「手本とする人が大勢いてまだまだ自



# インタビュー 岡崎朋美

分は成長できる」と思うなど、岡崎さんのモチベーションはさらに高くなっていました。「プロ意識を持たなければ」と。

1年目から自己ベストをつぎつぎと更新し、まさに急成長を遂げた20歳前後のころは、自分の身体を作りながら着実に成長していく実感が持てる充実した毎日だったそうです。

その後、女子スピードスケートの日本代表として、1994年、22歳でリレハンメル五輪14位。1998年、26歳で長野五輪銅メダル。2002年、30歳でソルトレイク五輪6位(日本新)。2006年、34歳でトリノ五輪4位。2010年、38歳でバンクーバー五輪にも出場、冬季五輪の日本人女子選手としては前人未到の5大会連続出場を果たすなど、長い期間にわたって、第一線で活躍を続けました。

2013年12月のソチ冬季五輪代表選考会を機に引退する42歳まで、現役のアスリート生活を続けられたことについて、岡崎さんは、自分が「遅咲きだったのが却って良かった」と話します。

「実は高校進学の際、別のスピードスケートの強

豪校からお誘いをいただいていたのです。でも、スケート一本にまだ進路を決めきれいなかったこともあり、トレーニングが厳しいと評判の強豪校ではなく、競技を楽しむことができそうな高校を選びました。若いうちから頭角を現したものの、周囲の期待を背負って強いプレッシャーのなかで目標を失ってしまった選手も見てきました。五輪への初出場は22歳とやや遅めでしたが、このころようやく、スピードスケートに本気で頑張りたいという自分の気持ちや、アスリートとしてやっていくことの面白味が分かってきたこともあって、周りの熱狂に翻弄されることもなく、物事を俯瞰して冷静にすることができたように思います」。

また岡崎さんは、メディアにもはやされるスター選手を外側から見ている、「自分を見失わずにどう対応していくべきなのかを学ぶことができました。とくに橋本聖子さんのマスコミをはじめとする周囲への対応はよいお手本でした」と言います。

そんな観察力が功を奏したのか、岡崎さんへのマスコミ各社の対応はとても好意的だったと振り返ります。マスコミはこぞって「朋美スマイル」を追いかけて、関係も非常に良好。「ヘルニアで一時選手生命が危ぶまれたときは、私よりマスコミがどんよりしていました。逆に、私が落ち込んではいられないと奮起するきっかけになったほど」と笑います。

「病気もケガも、アスリートは順調なときこそ油断せず、本番に体調をベストに持っていかけるよう気を配らなければなりません。トリノ五輪は前哨戦がとて順調だったので本番に向けたコンディション作りには却って慎重に気をつけていたのですが、レース直前で体調を崩して調整のサイクルが狂ってしまい、100分の5秒差でメダルを逃して

しまいました。原因は体調だけではないかもしれないかもしれませんが、完璧ではない状態で臨んだ戦いで負ける悔しさといったらありません」。

アスリートとして学んだ「後悔のないよう万全を期すことの大切さ」も岡崎さんを20年以上も支え続けたプロ根性のひとつのようです。

## 母として、今は子育てに奮闘中

岡崎さんは今、生活の拠点を東京に移し、都内で子育ての真っ最中です。

知床半島のつけ根にあるオホーツクの小さな町で育った岡崎さん自身の子どもの時代は、地域にあるお店といえば農協が運営するスーパーくらい。買うものはお菓子など限られたものばかりで、おこづかいをもらった経験はなかったといいます。

「お友だちの家にあるオモチャが羨ましいこともあったけど、覚えているのは、当時の人気アイドルがプリントされた自転車を買ってもらうって、とてもうれしかったことくらいで、とくにおこづかいを欲しいと思ったことはありませんでした。ただ、もらったお年玉を親に預ける際には、「封筒に『朋美 あけるな』と書いて封印していましたね」というほほえましいエピソードもあるそうです。

高校時代はスピードスケート仲間の4人で下宿生活を送り、下宿屋のおじさんが管理して渡してくれていた毎月のおこづかいでやりくりしていたそうです。「自転車に乗れない冬は、下宿から練習場までバスや電車を使って移動するので、交通費がけっこうかかりました。そんななか、仲間の一人が、途中、4人割り勘でタクシーに乗るなど、なるべく交通費のかからない移動方法を考えてくれたので、交通費の管理も、そんなやりくり上手な彼女に任せていま



した」といいます。

「相手が得意な分野であれば素直にお願いする  
「甘え上手」などところがあるので、私ができそうに  
ないことはみんなが心配してくれるんです」と屈  
託なく笑います。

若いころからスピードスケート中心の生活で、  
取り立てて欲しいものはなく、お金に苦労した記  
憶もないそうですが、決して浪費はしないタイプ。  
無駄なことには敏感で、「残り湯で洗濯は当たり前」  
という経済観念の持ち主でもあります。

2007年に結婚し、現在は5歳の娘の母。愛  
娘の欲しがるものをついつい買い与えてしまう甘  
い夫に対して、「ママは必要なものしか買いません」  
ときっちり役割分担をしているそうです。

「与え過ぎて、ものを大切にしない人に育ってし  
まうのは嫌。買ったときだけ大切に、すぐ放  
り出してしまったり、いつの間にか忘れて、また新  
しいものを欲しがったりされると、娘を何も無い  
故郷に連れて行きたくなりますね」と笑います。

都会はいろいろなものを目にする機会が多く、な  
んでも欲しくなるのが子ども。暮らしには便利なも  
のが揃う反面、教育上はどうしていけばよいのだろ  
うと、しばしば判断に迷うことも多いそうです。

「都会という便利な環境でガマンをさせるのも教  
育。でも、ガマンをさせ過ぎると、大人になったら  
その反動が出ることもあると聞くので、その与え  
方の加減には悩むこともあります。きっと子ども  
の様子を見て、理解させながら、手探りで子育て  
していくのだと思います」。

もの大切さや、いつも自分のワガママが通ると  
は限らないことなども教えながら、「あなたのお願  
いを聞くから、パパとママのお願いも聞いてね」と

いう親子のやりとりが岡崎さんファミリーの日常  
だと言います。

まだお子さんも幼く、おこづかいを与えたり、  
教育費にお金がかかったりするのもこれから。そ  
のため、将来のライフプランはまだ未確定な部分  
も多いという岡崎さん。

「子どもにいくら残して、自分たちはどう、生き  
たお金」の使い方をしていくべきか、ベストな方法  
はこれから勉強していくつもりです。年金や税金  
のことなど、老後苦労しないように、事が起きて  
から焦らないように、もっと簡単に分かる仕組み  
があればうれしいですね」。

### 子育て経験も生かし次のステージへ

岡崎さんは夫婦ともにスポーツの世界で育ってき  
たため、お子さんもアスリートに育てたいという気  
持ちは満々。ただ、「親はあくまで子どものあと押し  
をするだけ。上手に誘導してあげることが一番のサ  
ポート」だと言います。

「子どもは途中で嫌になってしまうことも多いも  
の。中学生になればさまざまな誘惑があり、興味関  
心もあちこちに移っていきます。そうした中でスポー  
ツは1日でも休むと遅れを取り戻すのが大変と、親  
が焦って嫌がる子どもにも無理強いすると反発してし  
まいますし、自発的に『やりたい』と思えることが  
一番。本当に行きたくないときは『ちょっと休もう  
か?』と気晴らしをさせてあげることも大切です」。

幼いころから一つの競技を続けてきた岡崎さん  
ならではのアスリート育成論は実践的で説得力が  
あります。今後もしもそちらの経験を生かして活  
躍していただきたいところですが、どのような展望  
を持っているのでしょうか。

「やはり冬季スポーツ、スピードスケートの振興  
にはなんらかの形で貢献していきたいです。もっと  
競技の知名度を上げること、現役選手に活躍して  
もらうこと、やはり五輪でメダルを狙える選手を  
増やしていくことに貢献できたら、支えてもらった  
皆さんへの恩返しにもなっていると思います」。

スピードスケートは個人スポーツ。ただ、五輪選  
手は、自分一人だけの力で五輪に出られるわけでは  
ありません。監督、マネージャー、ヘルスケアやメ  
ンタルケア、栄養のプロ、スケート靴の開発に携わ  
る技術者など、さまざまな分野のサポートを受け、  
初めて五輪の舞台に立つことができるもの。末っ子  
らしく上を見て学び、自分の振る舞いを自然に身に  
つけていける柔軟さと、しなやかな発想、明るい朋  
美スマイルで周囲を味方につけていく人間力の高  
さが岡崎さんの大きな魅力です。

このたび、25年以上在籍した富士急行を退職し、  
新たなステージへと羽ばたいて行く決断をした岡  
崎さん。素直な感性で周りを巻き込んでいく力を  
武器に、今後どのような場面で私たちを魅了して  
くれるのか、とても楽しみです。



#### ●岡崎朋美（おかざき・ともみ）

元スピードスケート選手。北海道出身。  
高校卒業後、富士急行に入社しスケート部  
に所属。冬季五輪に日本人女性選手として  
最多の5大会連続出場を果たす。1998年  
の長野冬季五輪では日本女子短距離界初の  
銅メダルを獲得し、朋美スマイル、で一躍  
人気者に。結婚・出産後も「ママさんアス  
リート」として活躍。2013年、ソチ五輪代  
表選手選考競技会を最後に現役を引退。